

# 第二回大東亜文学者大会・決戦会議 ——太平洋戦争末期の文学者

松本 和也

## 1. はじめに

昭和 17 年 11 月 3 日～5 日に行われた第一回大東亜文学者大会（以後、第一回大会と略記）につづき、第二回大会が昭和 18 年 8 月 25 日～27 日（見学等は 9 月 5 日まで）、「決戦会議」と称して開催された。日本代表 99 名にぐわえ、大東亜共栄圏各地から満蒙華代表 26 名が参加した。戦局悪化が著しい中、第二回大東亜文学者大会（以後、決戦会議と略記）は、10 月 10 日の双十節に開く予定を 8 月にくりあげて開催された。あらかじめ、決戦会議の概要を先行研究から引いておく。

大会第一日、開会式は、戸川貞雄司会で午前九時に幕をあけた。国民儀礼に続いて久米正雄の開会の挨拶、下村海南が座長に扱ばれ、皇軍感謝決議ののち、天羽英二情報局総裁、青木一男大東亜大臣（代読）、谷萩那華雄陸軍報道部長、栗原悦蔵海軍報道部課長、水野錬太郎興亜総本部総理の祝辞、さらに各国代表の挨拶（日本＝横光利一、中国＝周越然、満洲＝古丁、蒙古＝包崇新）、中島健蔵によるアジア各地から寄せられたメッセージ朗読（タイ＝ディレック・チャイナム、ビルマ＝バー・ハロ、フィリピン＝クラロ・エム・レクト、ジャワ＝アルミン・バネー、マライ＝イシヤク・ビン・モハッド、印度＝チャンドラ・ボース）、吉川英治の宣誓文朗読、最後に高島米峰の発声で万歳三唱、開会式を終了した。歓迎午餐会ののち、午後からひらかれた第二部は黒田国際文化振興会理事挨拶、山田耕作のタクトで日本交響楽団の「闘魂」「明治頌歌」演奏、詩歌朗読前田夕暮、富安風生、渡辺緑村、宮城道雄の琴曲、松本幸四郎の舞踊など、歓迎の祝賀会が行われた。／決戦会議第二日は、二六日午前九時から大東亜会館で開かれた。議題は「決戦精神の昂揚、米英文化撃滅、共栄圏文化確立、その理念と実践方法」である。司会戸川貞雄、議長・副議長は前回同様菊池寛、河上徹太郎。〔略〕／本会議三日目は午前九時一〇分開会、国民儀礼ののち直ちに三分科会に分れ、第一分科会は委員長高島米峰以下四四名、第二分科会は白井喬二委員長以下四〇名、第三分科会は川田順委員長以下四一名でそれぞれの分科別テーマについて討議された。〔略〕／午後一時から本会議再開、各分科会の報告を第一（今日出海）、第二（中島健蔵）、第三（川田順）の順で行い、謝希平が「前線将兵に文学大会の名で慰問電報を送ろう」と緊急提案したのち、久米事務局長より大東亜文学賞（第一回大会で提案された尾崎喜八、丁雨林、木村毅らの「大東亜文学大賞」の具体化）の受賞者発表があり、日満華各地域における文学活動の報告に続いて大会宣言の決議（朗読は火野葦平）、文学賞授賞式、聖寿万歳で会を閉じた。大東亜文学賞は正賞者なく、次賞として、「陳夫人」庄司総一、「海原にありて歌へる」大木惇夫、「沃土」石軍、「黄金の窄き門」爵青、「日本印象」および「予且短篇小説集」予且、「貝殻」袁犀が決まった。／二八日夜、軍人会館で芸芸大講演会（講師、久米正雄、井上司朗、田兵、柳雨生、包崇新、沈啓元、小林秀雄）、各所見学後、九月一日特急「つばめ」で西下、三日大阪朝日会館で、講演会（講師・川田順、井上司朗、亀井勝一郎、関露、呉郎、陳綿、王承瑛、片岡鉄兵）、近畿地方の神社参拝と見学を兼ねて一巡したのち、京都・都ホテルで五日の夜解散した。

個々の発言の詳細は「特輯・第二回大東亜文学者決戦会議号」（『文学報国』昭 18・9・10）に詳しい<sup>2</sup>が、

1 尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」（『旧植民地文学の研究』岩波書店、昭 46）、37～40 頁。  
2 櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』（青木書店、平 7）もあわせて参照。

こうした決戦会議について、尾崎秀樹は次のように厳しく批判している。

「世界文化の破壊を企てるは何者ぞ、われに必勝の信念あり、今こそアジアを一とする雄渾な構想の下に大東亜建設の責を果す秋」とか、「敵米英の陰謀を撃攘、民族の血盟に期す大文学」などという空疎な文字の列を眺めていると、さすがに気が重くなる。「気がめいる」とはこのことであろう。日本近代文学の土壌のなさ、根なし草の実相を、これほど熱っぼいそらぞらしさで、さらけ出した事件が近代文学の歴史の上にあっただろうか<sup>3</sup>。

戦後の価値観、あるいは、外地から参加した文学者からすれば、《帝国の文法》<sup>4</sup>に則り、大東亜戦争を言祝ぐ大東亜共栄圏の文学者としての定型化された発話＝支配的な言説の自発的な言表を要請される大東亜文学者大会とは、悪しき文化帝国主義の実践として批判すべきものには違いない。それでも、日本－大東亜共栄圏の文学者にとって決戦会議とは、第一に文学活動の一端であり、第二に《これ將に皇国に生を享けた文学者が肇国の精神に基づく思想戦の先頭を往くもので、大東亜理念強化に挺身する決戦文学者の戦場であらねばならぬ》（「われ等思想戦の先登たり／即断と実践を／精鋭濺刺の代表来る」、『文学報国』昭18・8・20、1面）といった意味での戦場であり、さらに第三に戦時下において文学者が、いかに社会的存在意義を實踐－言明し得るかという言説闘争の場でもあったのだ。

本稿のねらいは、前稿<sup>5</sup>につづき、決選会議に関わって産出された言表の調査・分析を通して、支配的な言説やそこからの逸脱がどのように編成されていったのか、その具体的様相を考察することにある。

## 2. 第二回大東亜文学者大会への期待

本節では、決戦会議の開催に先立ち、各紙誌に掲載された関連言表を分析していく。

決戦会議の開催が報じられると、第一回大会の反省をふまえた期待が表明されていく。無署名「社説文化による提携の強化」（『朝日新聞』昭18・7・16）においては、《忌憚なくいへば、吾人はこの機会に楯の両面を省み、率直に過去の失陥を繰返さないだけの用意をもつ必要もこれを感じさせられる》として、第一回大会の反省すべき点が次のように指摘されていく。

第一に我が文化人の中には、文化といふものが抽象的に存在し得るやに考へ、爾余一切の社会現象と引離し、文化は文化として相互提携の対象となり得るものと観るもの珍しくないに反して、外来代表の多くにあつては、文化と實際生活とを密接に関連せしめ勝ちであつたことは、これを忘れてはなるまい。次に、大会そのものを取扱つた人々の一部が外客を扱ふ途を知らなかつたため、折角の善意が相手方の反感を呼んだ例もないではなかつた。（2面）

また、《当時の模様は一切知らぬが、事後当事者は異口同音に大成功と報告してゐたにかゝらず、沙上の偶語は大陸の文人たちの不平といふものを伝へた》と、第一回大会の様相を問題化する「満堂の清風を大東亜文学者決戦大会に切望す」（『朝日新聞』昭18・8・7）の佐藤春夫は、《第一次の大会は第一次だから多少は形式的になる必要もあつた》ことを認めた上で、《度重なるにつれては真の親愛の心を生じ、事務としての具体化に先立つて何等警戒するところなく互に手を携へて皇道、仁義の一路を楽しみ語る真の詩的な会合の心を得たい》（4面）と、希望を語っていた。ほかに、林房雄「沈啓无君と語る【三】中国文報の結成」（『読売報知』昭18・8・26）で紹介された、沈啓无による次の発言もある。

昨年の大会には色々といふやうな非難もあつたやうである。例へば議題のみ多すぎて、何一つ実行されてゐないといふやうな非難である。だが、僕の見るところでは、何はさて置き大会が中国文学者に与へた影響は絶大であつた。この大会によつて、中国文学者は立ち上つた。今蹶起しなければ再び時機は来ないとまで思ひつめた。それだけで、僕は満足なのである。特に、君や河上徹太郎、小林秀雄君

3 1)に同じ、40頁。

4 申知瑛「他者は、他者と出会えるのか——「大東亜文学者大会」の植民地人たち、その発話・変形・残余——」（『思想』平25・3）、123頁。

5 拙論「第一回大東亜文学者大会の修辞学——大東亜共栄圏言説の亀裂」（『神奈川大学アジア・レビュー』平30・3）、「文学（者）と思想戦——第一回大東亜文学者大会の修辞学・補遺」（『文教大学国際学部紀要』平30・7）参照。

が北京、南京、上海に滞在してくれたことが、中国文学者をして日本文学者の真意を理解させることに非常に役立つ。ありがたいと思つてゐる。(4面)

ここでも第一回大会の形式的な局面は批判されながらも、その《影響》自体は実効性を持ち、さらに個別具体的な人間関係を通じて、日本の文化工作は進んでいったというのだ。こうした言表を裏づけるように、長興善郎は「力強い心の団結」(『朝日新聞』昭18・8・22)において、《昨秋の第一回大会は、何分初めてのことで、種々不馴れのための届かない点もあつたにかゝらず、会の空気のおのづからな真剣味のために列席した同胞諸氏の胸に意外な程の反響があつたらしいことは慶びに堪へない》と第一回大会を評価し、さらに次のように決戦会議の意義を提示-確認していた。

この戦争は大東亜諸民族の解放であるとともに今までの永い世界史の犯して来た罪過——もちろん我々もまたお互にその責めを負ふべきであるが——の肅正であり、民族の伝統的病弊と、腐敗とからの更生といふ実に正々堂々たる名目をもつた義戦である。〔略〕その自覚と団結とのために、文学者大会の意義は実に大きいのである。(4面)

こうして文化領域に直結された大東亜戦争のイデオロギーに関わって、文学者として国策に貢献し、同時に自らの社会的存在意義を確保しようとする言表が、この時期の支配的な言説を構成していく。

第一回大会からの変化として、決戦会議前に強調されたのは中国の変化である。《顧みれば去秋の第一回大会の当時に比して、僅か一年足らずの間大東亜の情勢は著るしく變つてきてゐる》と指摘する「真の文化提携へ 大東亜文学者大会に望む」(『朝日新聞』昭18・8・11)の奥野信太郎は、《なかんづく大きな出来事》として《参戦後の中華民国が租界の返還を受け、条約の改訂を得て、こゝに更新近代国家として成長しつつあること》(4面)だと指摘した。あるいは、次に引く高田眞治「論説 第二回大東亜文学者大会への希望」(『文学報国』昭18・8・20)のような言表もみられた。

今や支那は日本と共に参戦して枢軸国側に加はり米英撃滅を誓つてゐる。大戦の完遂と共に進捗しつつある大東亜文化建設においても、日本が現在肇国の伝統精神に基底を置いて大東亜の新文化の創造に努力しつつあるのに即応して、支那四千年の伝統文化の精神に則り更に新らしき創造に協力して、以て光輝ある東洋の再造に挺身せられんことを希望して止まないのである。これは東洋の復興であると共に支那文学における文芸復興でもあるのである。(1面)

もとより、《大東亜の新文化》における日／中の序列関係は明らかだが、それでも重慶政府(とそれを支持する抗日文学者)をどのように懐柔するかも含め、中国の動向は注目された。その高田は「新文化の創造へ」(『朝日新聞』昭18・8・22)では、《謂ふなかれ、決戦態勢下何の文学者の会ぞ》と、戦時下における決戦会議への疑義を牽制しつつ、《大東亜戦争は一面戦争であると共に一面建設》で、《その戦争なるものも、我が道義をもつて米英の詐謀と物質力をもつて世界を制覇せんとする野望を撃滅する義戦であり聖戦》(4面)だと、戦争に関係づけて文学者の社会的存在意義を示した。

もちろん、文学報国会事務局長の久米正雄が「真の友よ来れ」(『文学報国』昭18・8・20)で言表したように、《洵に大御業の偉いさを、直接大東亜の文学者達に知らしむる事》を《本大会の真意義》と位置づけ、《此の決戦の真つ只中に、心ある大東亜の代表的庶民等が、一同に会し得る事、それだけで既に無限の収穫》(1面)だとみる立場もあった。しかし、より積極的には、文学者にも実践的な貢献を期待する高橋健二「思想的完遂へ 決戦文学者大会の意義」(『朝日新聞』昭18・8・18)のような言表もある。《アジアは精神的に一つであるばかりでなく、政治的にも外交的にも軍事的にも一つにならうとしている》、《しかも、日本なくしてアジアのないことは、孫文はじめ万人のひとしく認めるところ》だと前提した上で、《文化戦の主翼を担ふ大東亜の文学者が日本の首都に会して、大東亜戦争完遂の方策について議する》点に、《深くして、かつ極めて現実的な意義》を見出す高橋は、《中国の参戦によつて対日抗戦の意義を失つた重慶政権に最後のひと突きを加へて崩潰に導くために、またボース氏の下に独立国民軍が編成され、ビルマの立ち上つた今日、印度大衆をゆり起こすために、叡知の高さと感覚の鋭さを誇る文学者はその全能力を傾けるべき》であり、《さうあつてこそ、決戦文学者大会の名にそむかぬものとなる》と、文学者の現実政治への実践的寄与を求め、さらに次のようにつづけている。

真に胸を開いて親しみ合ひ、参戦国文化人の心のつながりを緊密なものにしなければならないの

は固よりであるが、今日はもはやさうした漠とした目的だけで安んずることは許されない。〔略〕時としては文化戦が武力戦の一步先を切り拓いて行かねばならない。また米英の思想謀略を防衛するという消極的態度に止まらず、これを圧倒する気概と智謀がなければならない。これらの点において本大会が単なる示威以上に積極的な方策に達することを切望してやまない。(4面)

ここで高橋が想定している内実は《文化戦》(思想戦-文化工作)の域を出るものではないが、大東亜戦争のイデオロギーをそのまま体現するかのような積極性は、やはり支配的な言説を構成していく。

こうして、決戦会議に託された時局的意義およびその参加者への期待が支配的な言説を織りあげていくのだが、新聞各紙の社説においては(結果的にせよ)少なからぬ逸脱がみられもした。

第一に、次に引く無署名「社説 大東亜文学者大会開かる」(『読売報知』昭18・8・24)がある。

これらの敵の宣伝の虚偽性を別抉してこれを封じ、さらに進んで敵方にたいして効果ある宣伝を行ふことは目前不可欠の喫緊事である。しかして共栄圏各国の文学者はペンをもつて、思想をもつてこの重き責任を担当すべきであらう。また共栄圏各地の民心を敵の宣伝から護り、大東亜建設の大業に積極的に赴かしめることも文学者のこの時局に担ふべき大きな役割であらう。

問題なのは、引用につき《この大会を機として特に日本文学者諸君に希望したいこと》として、《視野を広くして政治、経済、社会その他の方面にわたり研究して欲しい》という要望にくわえての、《近代中国語を解し、中国文学に通曉し、支那に特に関心をもつやうな人々が大会の表面に立つことが必要であり、さうでなければほんたうの日華文化流通の如きは望まれない》(2面)という一節である。第一回大会以来、会議の使用言語は問題とされてきたが、大東亜共栄圏の中心である帝国日本にとっては、その文化的序列関係に即して、構成員が日本語を学ぶべきだというのが公式見解である。この使用言語-翻訳の非対称性は決戦会議においても問題となるが、日本の文学者に中国語・中国文学への《関心》(学習)を要請する上の社説には、従って表面的には支配的な言説でありつつ、そこからの逸脱もみられる。

第二に、無署名「社説 大東亜文学者大会に望む」(『朝日新聞』昭18・8・25)では、《将来をおもふとき、およそ東亜文化の復興が日本、中国、印度三大民族を中心として企てられなければならぬことは、およそ東洋文化史の顕示するところ、こゝに改めて喋々を要しない》という前提の上で、《今後の此種大会には、広く、仏印、泰、ビルマ、マライその他代表のほか、さらに印度代表の参加をみんこと、まことに切望に堪へない》(2面)として、結局は代表を招聘できなかった地域をあげることで、決戦会議においても大東亜共栄圏全地域をカバーし得なかったことを露呈することになる。

こうして決戦会議言説が新聞紙上を賑わせていく中、大東亜共栄圏各地域から招聘された文学者の声も開示されていく。ここでは、『朝日新聞』のシリーズ記事「文学者大会に寄す 出席代表の言葉①～⑦」から参照しておこう。具体的には以下のような記事が、連日寄稿-発表された。

①中国代表・周越然「昔の夢が実現」(『朝日新聞』昭18・8・10、4面)

②中国代表・關露「望み叶つて」(『朝日新聞』昭18・8・13、4面)

③中国代表・魯風「使命や重且大」(『朝日新聞』昭18・8・14、4面)

④満洲代表・田兵「筆を以て参戦」(『朝日新聞』昭18・8・15、4面)

④満洲代表・呉郎「精神的建設へ」(『朝日新聞』昭18・8・15、4面)

⑤南京代表・陳寥士「日本国民に寄す」(『朝日新聞』昭18・8・17、4面)

⑥北支代表・陳綿「東行に際して」(『朝日新聞』昭18・8・18、4面)

⑥北支代表・徐白林「建設の一翼へ」(『朝日新聞』昭18・8・18、4面)

⑦中国代表(杭州)・章建之「力強い提携」(『朝日新聞』昭18・8・19、4面)

⑦中国代表(武漢)・謝希平「新文学創造へ」(『朝日新聞』昭18・8・19、4面)

ここで各地域代表の文学者たちは、訪日の喜びを語り、決戦会議の意義を示し、日本文学を言祝ぎ、敵である米英(文化)撃破のため大東亜戦争への挺身を誓う。中でも注目されるのは、魯風の発言である。《この一箇年間に何が起つたか、大東亜民族解放運動の観点からこれを見ると、日本は先づ軍事方面では偉大なる力量を発揮して、その戦果実に赫々たるものあり、東亜共栄圏内に残存した英米の悪勢力を一挙に肅正して東亜民族解放戦争上不拔の基礎を奠定したし、政治方面ではビルマの独立、印度独

立運動の継続的發展、フィリッピンや南洋諸民族の解放運動の進展などを見る事が出来た》と直近の動向を整理する魯風は、《本年八月中国政府が日本の協力を得て百年来英米暗躍の汚点であつた上海租界を回収し、中国政府の実力を一段と強化し、大東亜戦争完勝への負担を全うせんとしてゐる》と、中国の動向にも言及した上で、次のようにつづけていく。

かうした有利な客観的情勢の下、大東亜戦争決戦段階における文学の分野にあつて、こゝに第二回大東亜文学者大会の招集を見たのは、その意義の重大なることに実に想像以上である。／大東亜戦争最後の勝利を争取する軍事、政治方面の進展のあとに来るべき思想戦争の強化は、軍事および政治との配合によつて東亜圏文化中心思想確立を推進せしめるであらう。この意味において大東亜戦争下文化人の使命はすこぶる重大といはねばならない。

より端的には、田兵が《筆を以て参戦する》と述べ、陳綿が《私は更に新たなる力強い精神を把握して帰來後、これをわが国人に伝へ、われ／＼をして大東亜共栄圏の一員たらしめ、もつてわれ／＼共同の勝利を争取せしめたい》と述べたように、文学者としての自身の役割を自覚した上で、さらに代表たる文学者が決戦会議終了後に各地域に戻り、帝国日本のイデオロギーを伝播していくというのだ。

総じて、決戦会議をめぐるのは、《決戦精神昂揚／米英文化撃滅／共栄圏文化確立／その理念と実践方法》といった「議題」（『文学報国』昭18・8・20）に即した言表が開催前から蓄積され、支配的な言説が形成され、その中で文学者はそれぞれの興味関心から、ある局面を追認－肯定し、あるいは具体化することで、支配的な言説の増強に貢献し、そのことによって個々の言表はその存在を保証されていった。その意味で決戦会議に先立つ言説は、大東亜戦争－大東亜共栄圏のイデオロギーを承認－拡声する役割を果たしていったとみられるが、それは文学者にとっては自身の職分を生かした貢献であると同時に、そのことを通じた自身の社会的存在意義の表明－確保でもあった。ただし、こうした支配的な言説の中で、ことさら抵抗を企図しないうちにも、そこからの逸脱が垣間見られたことも銘記しておく。

### 3. 第二回大東亜文学者大会における論点

本節では決戦会議の特徴をよく示したピックに注目して、以下それらの言説を分析していきたい。

第一に、先行研究において《対重慶ディスクール》<sup>6</sup>として注目された、一連の発言がある。中国の対米英戦参戦を契機として開かれたともみえる決戦会議を、橋本雄一は次のように捉えている。

その議場には、帝国日本の政治的スタンスと当然ながら合致して「中華民国政府」を南京所在の親日の汪精衛政権とし、その地域の作家たちを招聘している。抗日戦争を戦う重慶では、蒋介石政権の中華民国下の作家たち——中国の近代文学を造りかつ代表する作家たち——が集い、抗日文化戦線を担っていた。大東亜文学者大会の第二回では、この重慶の作家たちへの言及が非常に多く見られる<sup>7</sup>。

こうした局面に注目する橋本は、この論点に関わる多くの発言を分析した上で、《日本人発言は、先に見たように、重慶政府下の中国文学者にたいして「帝国日本」「大東亜」「聖戦」の意識構造のもとに、帝国日本の文法による一方的な価値判断をほどこし、その裏返しに彼・彼女らを「覚醒させ」こちらの側に「引き入れる」という滑稽で暴力的な欲望も持っていた》<sup>8</sup>と指摘している。基本的には首肯すべき指摘だと思われるが、言表の分析以前に価値判断が明らかなきらいも否めない。ここでは、事後的にみれば《暴力的》には違いない発言を二つとりあげて、少しく分析をくわえてみたい。

その一つは、支那通とも評され、『魯迅伝』（筑摩書房、昭16）の著書もある小田嶽夫による「大東亜文学者の重慶への戦ひ」（『読売報知』昭18・8・27）である。《支那事変といふものはある意味で中国の知識階級が起したものと言へると思ふが、今日重慶地区にある知識階級は果して如何の感慨を持つ

6 橋本雄一「『大東亜』の時間、ネイティヴの時間——第二回大東亜文学者大会にある対重慶ディスクール」（『東京外国語大学論集』平24）、1頁。

7 6)に同じ、3頁。

8 6)に同じ、9頁。

てゐるであらうか」と問いを提示する小田は、《日本の対支新政策を前にしては恐らく彼等の大部分は又深く思ひを新たにしているのではないかと想像される》と述べた上で、次のようにつづけていく。

何等かの方法によつてこの知識階級を早くわれわれの方へ引きもどすことは東亜の文運のためにも大切なことであり、又蔣政権を名実共に一個の地方軍閥に墜落させることに大に必要であり、その大任はかかつて中国文学者の双肩にあると思ふ（4面）

小田にしてこの発言をせしめる程度には、決戦会議という場は《帝国日本の文法》がいきわたっているのだが、小田としては日中戦争の解決（の一助）を同国の文学者に托した、ということでもあるだろう。その小田に言及した中国代表の発言としては、次に引く柳龍光「重慶の友へ 諸君よ外衣を脱げ／東亜への復帰を待つ」（『毎日新聞』昭18・8・27）があり、文字通りの呼びかけとなっている。

諸君、五四運動以来の中国文学活動に関して、日本文学者は全くよく理解し、且つ尊重してゐるのだ。魯迅のやうなわが文学の先導者を日本文学者は崇敬、愛読してしてをり、小田嶽夫の書いた魯迅伝の中には、中国文学及び文学者に対する理解が他のどの国にも見られない程に現れてゐるのではないか。また日本は我国にこのやうな輝かしい文学歴史があるからこそ常にその発展を援助してゐるのだ。日本の心してゐるものは決して中国文学の喪失ではなく、中国文学の助長と進展である。

ここで柳は、日本文学者（小田）による中国文学者（魯迅）理解を引例することで、日本（人）に中国文学に対する理解－敬意があることを示そうとしていく。とはいえ、《東亜は今新しい発足をなしてゐる。今回の文学者大会でも米英文化を徹底的に撃滅し、私ども東亜の民が住んでゐる地域から払拭しようといふことが重大な議題となつてゐる》と決戦会議のイデオロギーを補完する柳は、そのような立場から、《このやうな時、古いものにしがみついてゐる諸君の姿が私には何か同じ東洋にありながら独り米英を空だのみしてゐる重慶政権の象徴のやうに思へる》と否定的に意味づけ、《重慶の友よ／はやく君達の身につけてゐる米英文化の外衣を脱ぎ捨て給へ、そして私どもの陣営に参加し給へ。私達はその時の来ることを確信して君達を待つてゐる》（4面）と、自らの正当性を担保した上で、しかし《友》たる中国文学者へと呼びかけていく。こうした言表で示された、文学者個人レベル、個々の作品を通じた日中文化交流への隘路もまた、支配的な言説から仄見える、そこからの逸脱の契機ではある。

第二として、思想戦－文化工作が主な目的とされた決戦会議にあつて、文学者が文学者としての職能を生かした上で、いかにこの戦争に実践的に貢献できるのかという文学無力説<sup>9</sup>として、昭和10年代を通じて問題化されてきた議論もみられた。石川達三は「文学者の挺身」（『朝日新聞』昭18・8・25）において、《戦勝のために、作家はいかに挺身すべきであるか》という問いを改めて提示した上で、《もつと具体的に、実践の方法として考へられなくてはならない》と方向性を示した。《軍人が命をすてゝ、より大なる命を生きると同様に、作家は文学をすてゝ、より大なる文学精神に生きなくてはならない》という石川は、《文学をすてる方法に二種類ある》として、《自己の文学をすてゝ、国家の要求する文筆に生きること》と《全くペンを離れて国家が要求する最も緊急な仕事にたづさはること》をあげる。すでに、国家を度外視して芸術性を目指すことは論外とされているのだが、《東京に焼夷弾が投下されば、作家もバケツをもつて水をかけなくてはならない》、《文章を以て報国し得ると考へるのは、目下の国内情勢がなほ平穩だから》だという石川は、次のような結論を示す。

要するに、作家は何時にてもペンをすてゝ銃をとり、もしくは鍬やハンマーをとる用意がなくてはならぬ。その時がくる迄は、文学を離れて他の任務につくもよく、文章報国の道に挺身するもよい。但し、文章報国といふ言葉はしばしば言葉のみに終つて、自分の怠惰と保守性とを弁明する手段に用ひられることが多いのではないかと思はれる。／作家は、今日多忙を極めてゐると私は思はない。利用すべき沢山の余暇があるやうだ。その時間を勉学修養に用ひるのは元よりよいが、自己の文学を培ひ、日本の文運を培ふよりも、先づ勝利のための一つの弾丸を造るために、彼の時間を割いて緊急な実務にたづさはる必要がありはせぬかと私は思ふのである。（4面）

ここで石川は、文学者が文学者でありながらなお、《日本の文運》よりも《緊急な実務》をとるべき

9 奥出健「文学無力説の系譜——主に戦時下——」（『解釈』昭58・8）ほか参照。

だと、言説上ではあるが、大きく舵を切った発言をしたことになる。同様の立場は、「“文化協定”締結の叫び 文学者大会必勝の体制整へて閉幕」(『朝日新聞』昭18・8・28夕)で紹介されるように岩倉政治によっても言明され、物議を醸したようである。新聞記事からその場面を次に引いておく。

文学者大会第三日目の第二委員会で突如発言を求めた帰還兵作家岩倉政治氏は『私は米英文化撃滅だけで我慢が出来ない／シエクスピア全集一千冊が大空から降らうとも問題にはならないが、一発の爆弾が落ちて来たならば我々は大いに問題としなければならぬ、私はこの時には防空員となる、兵士となる、ペンを捨て剣を採らう、剣がなくば敵に素手で組みついてゆく覚悟だ〔。〕大会は、国際親善的な、儀礼的な向に大会が流れてはならぬ、この決戦大会を機に文学精神は大転換をなすべきではないか／と絶叫、草野心平(華中)はこれに対し／その肚はすべての作家が持つてゐることで、それを強く胸に蔵して黙々と文学するのが、日本の作家の態度である／と応酬、委員会はこれを繞つて大波紋を描いたが、決戦体制下に処する日本文学者の心構へを吐露したのものとして、傍聴者に多大の感動を与へた(2面)

本土攻撃が現実的に想定－言表されていることが、石川発言との共通点である。そうした危機感の中、文学者／日本国民としての使命感が、実践へと向かわせていく。とはいえ、草野心平の発言にもある通り、文学者の実践的貢献とはあくまでも言説上の覚悟であり、極論すれば文章報国という具体的な実践方法に(理想的には無限に深めることが可能な)覚悟の階梯があり、その度合いをめぐる争闘であったようにもみえる。それでも、文学者による国家への実践的貢献の覚悟が相次いで言明されたことは、決戦会議がそうした言表を喚起する装置として機能したことの帰結ではある。

第三として、第一回大会以来の懸案である会議の使用言語もまた、決戦会議前後も含めて話題となった。大佛次郎は「誠実溢るゝ空気 大東亜文学者大会に出席して」(『朝日新聞』昭18・8・26)で、《大東亜戦争に対する決意を述べた満洲の古丁君の日本語などは日本代表の日本語よりも鮮かに聞えたくらゐで、驚きもすれば嬉しかつた》(4面)と素朴な感動を綴るが、大東亜共栄圏の構成メンバーはすべからく日本語を学ぶべきだという前提は暴力的で、しかも、彼／彼女らがいくら巧みに日本語を運用しても、真の日本人とは見なされることはない。そうした認識は、《蒙古語はその発音や抑揚の工合がどこか日本語と似てゐるので、聴いてゐながら、私は日本と蒙古との有史以前の関係を空想した》(4面)という牧歌的な空想を言表した「民族共通のもの 文学者大会第二日会議から」(『朝日新聞』昭18・8・27)の川田順にも通底しており、《似ている》ことや《民族共通のもの》が大東亜共栄圏内に見出されたとしても、それは帝国日本(日本語)を頂点とした序列関係を前提としたものにとどまる。

第四として、上記以外に、決戦会議における文学者の発言として注目すべきものを拾つておく。

芳賀檀「米英文化の撃滅」(『朝日新聞』昭18・8・25)は、《世界千年の未来のため、誓つて米英の唯物の文化を撃滅することをこそ、僕らの血統とし、愉しみとするのである》(4面)と、支配的な言説をなぞるものだが、《血統》という表現は過去に遡る伝統をこめた修辞とみられる。《本大東亜文学者会議といふものは何も大東亜戦争が起つてから興つて来たのではない》と語る「理想と直観力」(『文学報国』昭18・9・10)の横光利一もまた、《我が国の文学者でありますならば、今から二三十年前からどのやうな人にでもその胸中にこの希望や理想〔大東亜文学者大会の開催〕が抱かれて居たに違ひない》と、決戦会議を今・ここの要請とするのではなく、少なくとも近代の黎明期から構想されていたものだとして巨視的に捉え直し、さらに《我々東洋人は西洋人と違ひまして、一度こゝで相会するといふ、唯漠然たることで互の目的や意志は共通する、互に知り合ふ直観力を持つてゐる》、《さういふ優秀なる直観力を持つてゐる》(2面)とうそぶいては、大東亜共栄圏における伝統的な相互理解を前景化していく。《大東亜といふ言葉は政治的な言葉であり、共栄圏といふ言葉は経済的な言葉である〔。〕かういふ言ひ方も確かに必要と思ふが、しかし少くもわれ―文学者のみはかういふ言葉よりも、もつと適切な言葉がありはしないか》と提案したのは、「皇道精神の滲透 みやびの国の大調和」(『文学報国』昭18・9・10)の佐藤春夫で、《私は平常から皇道文化圏といふ言葉をこれに代へたらどうであらうと思つてゐますが、もし御賛成を得られたならば文学者だけの間でも、皇道文化圏といふ言葉を盛んにしたいと思います》(3面)と述べて、文学者として現状に忠実な表現によって、認識の転換を図ろうとしていた。

いずれも、文学者としての立場－社会的存在意義を確保していく言表でもあったといつてよい。

## 4. 第二回大東亜文学者大会を終えて

本節では、決戦会議後の言説を検討しながら、本稿の議論をまとめていきたい。

《いま、帝都の一堂に共栄圏内の文学者たちが会して、大東亜文学のことを話しあつてゐるときが、北に南に鮮烈な決戦の行はれてゐるときと同じであるといふことは、一種悽愴の機を胸のなかに呼びおこす》と、戦争と決戦会議の共時性を指摘した「大東亜文学者大会の成果 共栄圏確立の構想ぶり／実践への道開く」（『読売報知』昭18・8・29）の火野葦平は、《いま、第二回大会に列して、真実を愛する率直な文学者の熱情といふものが、高く美しく火花を散らして、大東亜精神樹立のために、すでに、一身一死をも忘却した地点に、心根を据えたと感じた》、《この大会の成果を疑ふことはできない》（4面）と述べて、戦場の兵士と内地の文学者とを《大東亜精神樹立》という理念でつないでみせた。

具体的な決戦会議の《収穫》については、白井喬二が「不拔の基礎を確立 第二回大会の輝く成果」（『文学報国』昭18・9・1）において、《大別》して次の《四点》に整理している。

（一）外地代表殊に中国代表の作家的現状が明瞭に理解されたこと（二）大東亜理念としての根本論拠に前進一步忌憚なき意志を表明せんとする傾向の顕著であつたこと。（三）各地域の文化諸団体の連絡機関の設置の件が単に一個の提案として、は無く、与論的に各地代表の間に具体的な方法で構想されてゐたこと。（四）大東亜文学賞の設定により今後の創作行動に明確な指標を与へたこと。（3面）

このように、大東亜共栄圏の文学者間の交流、理念の共有、文学者の具体的な実践案の策定などが決戦会議の収穫としてあげられている<sup>10</sup>。以下、決戦会議後における参加者の声を検討していこう。

「大東亜文学者大会を顧みて（上）」（『朝日新聞』昭18・8・31、4面）には、以下の五名が寄稿した。《誰が説明したわけでもないのに今度の大会では各地の代表が大東亜戦争の真意義を諒解し、日本の誠意のあるところを汲みとつてくれてゐるのをしみへ嬉しいと思つた》という「聖戦の真義徹底」の高嶋米峰は、そのことを《この大会の収穫》と捉えた。野口米次郎は「言語の困難」において、会議中の翻訳に関して《まことに手数のかかる段階を踏まないことにはお互が諒解しないのでは折角の話も興味素然となり易い》と問題化しながら、《「ことば」の問題は以後、共栄圏の文学者に日本語を勉強していただくことで解決》すればよいと先送りし、《文学者は要するに作品活動ではじめてその真骨頂を發揮するのであるから、大会の決定した大方針に則つて、その持ち場持ち場で書き抜かなければなるまい》と、実践としての創作を目標に掲げた。朝鮮・兪鎮午は「個人的接触の機会」というタイトル通り、《去年の顔見知り各国代表に二人三人まじつてゐて、うち解けた意見を交したのが第二回と歴史を重ねたゞけあつて私個人的に大きな収穫であつた》と語り、また、《大会においても理念充実に力が注がれてゐた去年に較べ具体性をもつた問題がとり上げられた点》を《大きな進歩》と評価している。華北・柳龍光／大内隆雄訳「よき作品の制作へ」では、《敵の陣営に彷徨してゐる我々の同胞たる文学の同志も、この大会の模様を聞知して我々の陣営に帰り来るであらうことを信じる》と、重慶へのメッセージが発信された。満洲・古丁は「次回は満洲で」において、《私は去年の第一回にも出席したが、今年は更に盛会で殊に日満華文化協定、翻訳機関の設置問題〔、〕大東亜文学雑誌創刊の要望など共栄圏内の文学者の魂が漸く一つになる機運が熟して来たことを感じた》と述べ、理想的な参加者を演じた。

つづく「大東亜文学者大会を顧みて（下）」（『朝日新聞』昭18・9・1、4面）には、以下の五名が寄稿した。豊島與志雄は「文化工作の基礎」で、《日満華の文化交流の具体案がまとまつたのは今次大会の大収穫》、《殊に膝つき合せた分科会の効果は大きかつた》と、決戦会議を評価するだけでなく、《真の文化の交流は抽象的な一般論からは生れない》、《一步一步踏みかためてゆく具体的な足がかりが文化工作には一層必要》だと、その成果を文化工作一般へと架橋した。台湾・楊雲萍「見学の方法」では、

10 大東亜文学賞については、楠井清文「大東亜文学者大会の理念と実相——第一回大東亜文学賞受賞作・庄司総一『陳夫人』を視座として」（『日本近代文学』平19・5）ほか参照。



会議言語にふれて《開会式当日各国の代表が各自の母国語を以て挨拶を行ひこれを日本語に通訳する情景は何か大東亜そのものの姿の表徴する和やかさであつて意義深い》と肯定的に評価した半面、《議題についてはもつと—具体的であつていゝ》と不満ももらした。蒙疆・王承琰は「分科会に時間を」にて、《今年は更に日本の代表作家の意見をきき論を戦はず意を持って出席したところ、各国代表間の意見がびつたり一致し精神もまた融合してゐるのを判然と知つた》といい、そのことを《力強い限り》と捉え、《決戦大会はその意味で成功》だと評価した。《昨年の大会は儀礼的にすぎる傾きがあつた》とする「語学の勉強へ」の華北・徐白林は、《今年はその点、例へば雑誌大東亜文学の発刊、各国作家の交換、翻訳協会設立の如き、殆ど全部が実現出来る実践的な提案が提出されたことは大会の進路を示すものとして喜ばしい》と述べ、また、《次会は大会や分科会の日程に更に余裕をもたせ、代表に考へる暇を与へて欲しい、そして意志疎通のために通訳を介さぬ代表を各国からもつと出しあつて欲しい》と要望し、さらに《各人が語学を勉強することも一つの宿題としたい》と問題含みの希望も表明した。《大会において日、満、華三国の思想的指導者達の意見が米英討滅の点において完全に一致したことは大きな収穫》だという「東方精神の復活を」の華中・謝希平は、《来年の大会においては三国を通じての文学の基本理念が英米の文化侵略を排除して東方精神を回復し、その具体的表現である新しい作品が大会に贈られることを切望する》と、作品というかたちでの成果を待望している。

こうした参加者が振り返った決戦会議の成果を、逸脱の言説も含めて、今一度まとめておこう。

第一に、《大会の進行方法は、昨年の第一回に比して可成り進歩してゐた》ことを評価する「論説第二回大会の成果」(『文学報国』昭18・9・1)の藤田徳太郎が論及する、会議の使用言語の問題がある。《昨年は、外国側の発言については一々日本語に通訳せられたが、わが国の発言は通訳をしなかつたため、国語を解しない人々には、結局会議の進行の様子が理解せられず、その点に不満があつたが、今年は日本語の発言をも支那語に通訳したため、一層効果があつた》(1面)とみる藤田は、翻訳の改善を喜び、日本語優位の言語帝国主義の非対称性を疑わないが、各地域代表者には課題として残った。

第二に、満洲代表・山田清三郎が「血盟と友誼の大旗掲ぐ 満洲文学者の真精神」(『文学報国』昭18・9・1)で、《第一回から比べると、今度の決戦大会はたしかに、著しく真実味が加はつてきたのは争へない、それには中国の参戦や対支政策の画期的な躍進といふことも、特に日華文学者間に親近の感じを増大せしめてゐるといふ事情もあるのであらう》(2面)と述べた、決戦会議に参加した文学者の意識の高まりがあげられる。《精神と精神との交流、心と心との触れ合ひ、魂と魂との結合からのみ大東亜意識は産れて来ると信ずる》という「大東亜意識の目覚め——第二回大東亜文学者大会より還りて」(『国民文学』昭18・10)の崔載瑞も、《この大会を通じて、かうした魂の交流が或る程度まで成し遂げられたことを、本大会の最も貴重なる収穫として喜ぶ》(135頁)と、その成果を言祝いでいた。

くわえて、逗子八郎が「東亜の友垣 大東亜文学者大会を顧みて【上】」(『読売報知』昭18・9・12)で指摘した、《今度の大東亜文学者大会で、一番の収穫は、何といつても、日満華の文学者代表達がお互に個人的に親しくなつた事》だという点について、次のような発展的な効果もあつただろう。

抑々文学者が互に相許すといふ事は、その背後の数千、数十万の国民が相結ぶといふ事である。否、もつと突込んでいへば、元来、文学者は、その国民の生活感情の代表者であるが故に、二つの国の文学者が睦み合ふといふ事は、その二つの国の国民感情が堅く結合するといふ事を意味する。今度の大会で各国代表がお互に同志の友情をもつたといふことの意義は、これ以上贅言する要もないであらう。(4面)

こうした伝播作用も、決戦会議において大東亜共栄圏から文学者を招聘した効果といえる。

第三に、中華代表・張我軍が「同甘共苦の高調」(『文学報国』昭18・9・1)において、《文学者は国民精神の具現者であり、思想戦に於ける勇士であるべき筈だ。この文学者が東亜各国から一堂に集まつて大会を開催して美英撃滅戦に於ける自分らの職場をはつきりと定めて勇猛邁進し、決心を新たにせんとする》(2面)と言表した、思想戦—文化工作を担う文学者の社会的存在意義も確認された。

第四として、否定的なあるいは逸脱的な事項も確認しておこう。中村武羅夫が「大東亜文学者大会を顧みて」(『新潮』昭18・10)において、《既に第一回を開催する以前から考へられてゐた南方諸地域か

ら代表を招聘することが、今度も遂ひに実現出来なかつたことは、何と言つても寂しい気がしたし、物足りない感じがした人々もあつたに違ひない》、《当事者としても、定めて残念なことだつたらう》(19頁)と指摘したように、招聘地域を広げられなかつたという限界は明らかだった。あるいは、中華・章克標「一以貫之——大東亜文学者大会所感——」(『文学報国』昭18・9・20)が、《孔子孟子の説かれる仁義道徳は東方の伝統精神であり、東洋文化の精髓であります、論語に『吾道一以貫之』と云ふ文句がありました、その道の一つに由つて貫くものは遂にこの東方道義的精神でなくてはならない》(2面)と言表したように、大東亜共栄圏の連携が、中国を中心として謳われる一コマもみられた。

こうしてみれば、決戦会議以後の総括もまた、大東亜戦争—大東亜共栄圏のイデオロギーに即した支配的な言説と化していくのだが、そこには反省や次回への要望にくわえ、逸脱の言説もまた孕まれていた。それでも、質量ともに力をもったのは、次に引く古丁／大内孝雄訳「文学者の決戦」(『満洲公論』昭18・11)のような、日本文化を称揚していく支配的な言説であったこともまた間違いのない。

数千年来、最初は日本が大陸の文化を吸収し、そして独特な日本文化を独創した。それ故現在の日本文化は、東洋文化の精萃なのである。ただに東洋文化の精萃たるのみではない、日本は世界文化の精粹を吸収したが故に、それは世界文化の精萃でもある。〔略〕我が大陸が喪失した文化が、みな依然として日本文化のうちに保存され、生きて来てゐる。〔略〕我々は自己の文化を愛するが故に、更に日本の文化を愛する。日本の文化を愛するが故にまた、己の文化を愛する。何なら亜細亜は本来一つであるからである。(95頁)

こうして、決戦会議の場／言説を通じて、米英を撃滅し東洋の盟主たらしとする帝国日本の地位は、大東亜共栄圏内において幾重にも承認されていく。そうした中、支配的な言説であると同時に、それを突き抜けるように逸脱していく、小林秀雄「文学者の提携 生活と精神の総和とは」(『文学報国』昭18・9・10)を、本稿の最後に検討しておく。《大東亜文学の新しい建設のためにアジアの文学者が一堂に会するといふことは非常に喜ばしいこと》だという小林は、《誠に喜ばしいことではありますが、提携といふことは非常に難しいこと》だといふ小林は、《文学者固有の職能—使命を次のように語っていた。

文学者の実行とは申す迄もなく書くことであります。書くことは喋べることではない。勿論喋つても構はない。喋つて済むことは喋つて済みますのであります〔。〕然し喋つてもどうしても済まされない大事なものがあるのであります。これを文学者は製作するといふ実行方法によつて示すのであります〔。〕〔略〕文学者の真の人の和といふものは実際の文学者の作品といふ実行によつて喜び、或は苦しみを分け合ふ所に現はれざるを得ないのであります。／さういふことを考へますとこの提携といふことは非常に難しいと思ひます。(4面)

ここで小林は、思想戦—文化工作としての決戦会議(の意義)を表面上は肯いながらも、しかし同時にそれを根柢から覆すようにして、文学者の《実行》を《作品》を《書くこと》に据え直してみせる。その困難な領域にのみ《文学者の真の人の和》をみる小林は、それゆえに文学者の提携は《非常に難しい》のだと断じる。大東亜共栄圏内において個別具体的な人間関係がいくら深まったとしても、使用言語をはじめとした文化慣習の差異があり、その個別性を保ちながら、同時に、それをこえていく普遍性を兼ね備えた文学作品の製作／享受——そのことが叶わなければ《大東亜文学》たり得ない、というのが小林の立場である。もちろん、帝国日本もこうした理念のもと、大東亜文学を目指してきたのだが、小林が提示する困難に比せば、いかにも安易である。これこそが、決戦会議最大の逸脱の言説である。

日中戦争開戦以来、戦争について問題含みの発言も少なからずあり、河上徹太郎に請われて決戦会議に協力した小林の本心はここでは問わないが、「文学者の提携」が支配的な言説から、本質的に逸脱していることは疑い得ない。同論も、支配的な言説としての一面をもつがゆえに言表されたにしても。

(まつもと かつや 所員 神奈川大学外国語学部教授)